

封
密
御

明治四十年九月二日

書記官長 **長**

主筆 書記官

書記官



日露通商航海條約及同條約附屬別約
御批准件並日露漁業協約御批准件
審査報告

謹々今回御諮詢、日露通商航海條約及同條約附屬別約御
批准件並日露漁業協約御批准件、ヲ審査スルニ日露

通商航海條約ハ明治三十八年九月五日ロンドンニ於テ締結

シタル日露講和條約第十二條ニ依リ日露戰爭以前ニ効力

ヲ有シタル通商航海條約ヲ基礎トシテ新ニ締結スル所ニ係リ

其ノ規定ハ大體ニ於テ戰爭以前ノ條約ノ規定ト同様ナリ

トス唯前條約第二條ニ於テハ一方ノ臣民ハ他ノ一方ニ於テ單ニ

商業ニ從事シ得ルニトテ規定モタルノミナリモ本條約ニ於テハ

工業及手工業ニモ從事シ得ルニトテ規定シ又前條約第十七條

舊外國人居留地ノ永代借地券等ニ關スル規定ニウケテハ帝國ノ體

面ヲ重ムル上ヨリ新條約中ニ之ヲ規定スル第一條ニ於テ農業

不動產ノ所有權其ノ他何等ノ^義權利ヲ以テスルヲ問ハズ土地ノ保有ニ

関スル各般ノ事項ニ於テハ且ニ最惠國ノ取扱ヲ受クヘキモノトスル

コトヲ規定スルニ止メ且ツ第五條亦項ニ於テハ帝國ヨリ派遺スル

外交官等ハ新聞雜誌等ノ検閲ニ関シ完全ニ自由ヲ享有スル

コトヲ規定シ其ノ他工業及商業所有權ノ保護等ニ関スルニ三ノ規

定ヲ加ヘムルヲ以テ新舊條約差異ノ要點トス又附屬別約ニ規定シ

ル留保ハ外交文書ニ依リテ明カナルカ如ク此ノ如キ留保ノ規定ハ最

惠四條款ヲ享有スル他ノ諸國ニモ適用セラハルニ非ラレハ其ノ實際

上ノ効力ヲ生セサルヲ以テ露西亞四ニ於テ爲レタル留保ハ現ニ何

レノ四ニ對シテモ適用セラレ其ノ實際上ノ効力ヲ有スルニモ拘ハラズ

帝國ニ於テ爲レタル留保ハ他ノ最惠國ニ對シテ此カハ特別ノ留保

コ約スルニ至ルマテハ未タ其ノ實際ノ効力ヲ有セサルナリ然レトモ此ノ

懸ニツキテ人彼レハ從前ヨリ何レノ國トモ同一ノ持約ヲ為シ来リタハ

モノナルヲ以テ始メテ此カハ留保ヲ為シタル帝國ト俄カニ同一ノ實効ヲ

収メ得ザルハ事實已ムヲ得ガレ所ナリト謂ハサルヲ得ス又露國ハ浦

潮斯德ニ於テハ從前何レノ國ニ對シテモ領事館ヲ設クルヲ肯

諾セザリシニモ拘ハラス今回本條約附屬ノ日露領事館ニ關スル

議定書ニ於テ始メテ同地ニ領事館ヲ開設スルニトテ承認シタハ
及ニコソラーエウスクリ

ハ帝國ニ取リテ大ナル便宜ヲ得タルモノト謂フヲ得ヘシ

次ニ日露漁業協約ハ日露通商條約第十一條ニ依リ日本海

「ガコーツク」海及「アノリシダ」海ノ沿岸ニ於ケル日本國臣民ノ漁

業權ニ関シテ締結シタルモノニシテ滿和條約規定ノ趣意ハ河川
及大江ヲ除クニ在リタルヲ以テ本條約第一條ニ於テモ該趣意ニ依リ
其ノ大江ハ附屬議定書ニ於テ之ヲ列挙セリ而シテ議定書第
三條ノ如ク星龍江海灣ニ於テハ外國労働者(日本労働者ヲモ
包含ス)ノ使用ヲ禁止スル等特別條件ニ從ハサル(カラサレモ)

アリテ多少ニ依リテ四臣民ノ不利益タルハテ條項ナキニアラサルモ大體

條約及議定書ノ規定ハ

ニ於テ適當報リナリト認テ得テテ協約第十二條ノ規定ノ

如キモ露西亞政府カ日本四臣民ニ對シテ漁業權ヲ許シタルコト

ニ鑑ミ輸入税ヲ課セサル旨ヲ約シタルモノニシテ他ノ地方ニ於テ漁獲

採取タル魚類及水産物ヲ輸入スル者ニ對シテ此ノ特典ヲ均霑

セシメテハ、趣意ヲ明カニセリ)

御諮詢ニ
依テ本件ハ何レモ御裁可
連議決セラレ然ル(キモト思辨ス

右議ヲ審査、結果ヲ報告ス

明治五年九月二日

書記官長代理

議長宛

明治五年九月二日

書記官長

米

主筆書記官

書記官

米

統監府及理事館官制申付

謹テ今回ハ諮詢、統監府及理事館官
制申付申付ニ書きたん、本年七月
二十日ハ精神協約可成、結果ハ統監府
理事館官制ハ、以テ院ヲ加フニ
其主筆官ニ新ニ親任官ニ